

What's the 図書館, and how should the 図書館 be?

弘前大学附属図書館長
雨森 道紘



この原稿は、2006年初頭に書いている。この号は2006年度の大学一(在校生・新入生・大学職員)のためのものとなる筈である。新春号となれば本来は「夢」を描くのが常道である。昨今は夢が描けない時になっているのか、世知辛さがそれを阻むのか、周りに夢が見えないのは寂しい限りである。しかし、夢はインセンティブを与える。また、それが**目的を得たものなら、そのチャンスがやってくれば一気にかなう**というのがこれまでの私の経験である。さて、図書館の夢とは何で、それがかなったら図書館はどうなっているのか？

夢の始まりである。そこでは新図書館は大学の顔となっている。(『チャペルと図書館が大学の顔である。』と言われる米国では夢ではなく、昔からの現実である。)大学の中央に、新図書館を含むドーム状の建物があり、そこからは放射状に各学部へ廊下が連結している。

(夢をより現実的に言えば、理工学部と人文学部が連結し《丁度大町通りの旧ダイエーと隣の駐車場が道路を挟んで、連結しているのと同じく》、さらに総合教育棟から2階廊下でこのドームが連結している。もう一つは、教育学部と2階廊下でこのドームが連結する。これで、文京キャンパス内では、全学部と図書館は連結する。連結だけは、割と簡単か？(次ページ挿画参照))

夢がかなったときの新図書館は、その場所に相応しい役目を担っている。

I 内部においては

「図書館が大学の顔である」とは、図書館が、大学の目的である教育と研究を達成するために、学生・教員の「知」のデータベースとなり、またその場所を提供することである。そのためには、教育・研究のための全ての学術情報資料は図書館に管理されてあって、現在のように図書が常時どこかの研究室に貸し出し中等ということではなく、**学生にしる教員にしる図書館に行きさえすれば、大学所蔵の図書は全て手にすることが出来るようになることである。**勿論、電子媒体は、ネットを介して図書館を経由せずに見ることが出来る。

さて、新図書館は学部・研究室の全てと連結されているので、利用の必要を感じたときは、雨も風も雪も気にならない。後で講義のある日でも、時間まで図書館をゆっくり利用することが出来る。教員も、図書は図書館にしか置いていないので、必ず図書館に行かなければならない。学生は、研究室で教員に会うのではなく、図書館で会うのである。「子は親の背中を見て育つ」と同じく「学生は(図書館での)教員の背中をみて育つ」。先生が勉強している様を見て育つことになる。そこには、教員と学生との懇談室や学生のための学習相談室や、学生評価において学生の多くが理解の難しいという講義の改善のために、教員のための教授法のカウンセリング室を設けるなど、教育のための多くの実習室が用意されている。また学習相談室では、レポートや論文の作成に不

安を持つ学生に対して、それらをサポートする大学院学生の Teaching Assistant も大いに活躍している。

II 学外においては

「図書館が大学の顔である」とは、外からみれば大学の「知」の窓口が図書館になるということでもある。図書館は大学の知のリソースの源であり、大学で生産される全ての機関誌、その他の情報誌や情報は、発信源を図書館が司っている。我が大学のモットーは、「世界に発信し、地域と共に創造する 弘前大学」である。より良き情報を発信することは、我が大学の生命線である。すなわち、①広報（競合する大学間での「個性ある大学の知」を宣伝する、魅力ある教育・研究を高校生・社会人に発信し、入学者を集める）、②情報（大学の「知」を有効に活かすための大学内外のネットワーク）、③地域連携（これは学術講演や、高大連携〔高校と大学の連携〕や、更には、H18年度21世紀教育テーマ科目で始まる『津軽学』の講義などを広く市民に開放することなども意味する）、④生涯学習教育（図書館の知を利用しない生涯学習などありえない）などを含み、少なくとも大学の「知」のリソースを用いての発信は、図書館が窓口となっている。

また新図書館が外からの「知」の受信の窓口となっている理由は、一般に社会人が大学の機構に疎い場合に、**ともかく「学術情報に関することならば全て図書館で聞**

くことが出来る」ように一元化することによって外部の人への最大のサービスを提供できることである。図書館は窓口に入った様々の情報をそれぞれの部署に振り分けることにより、外からの要望に対応している。このように図書館は大学の「知」の発信基地であると同時に、「知」のための受信基地にもなっている。

このような形態は図書館の持つ本来の機能に照らして考えれば理解は容易である。すなわち、本来、図書はその情報を単に蓄積しているだけでは全く意味を持たない。その情報を伝達することが目的として内包されているのである。従って図書の所蔵場所である図書館も同様にその目的を内包している。情報の媒体が様々な進化していくときに、図書館はその目的達成のために同様に進化していくのである。「知」の発信基地が図書館なのは、図書館の、そして大学の「進化」した形である。

さて、この夢は、部分的にはすでに日本のいくつかの大学で実現されている。特に私立大学では図書館が著しい変革をとげている。2007年度以後の「大学全入時代」には、大学の学生へのサポート体制こそが要で、学生がその大学で如何に満足を得られるかがその全てであり、**入学生に満足を与えられる大学のみが生き残ることになるからである。**

(あめのもり みちひろ)

